

次の文章は、「俊頼髓脳」の一節である。注を参考にしてこれを読み、

問1～問5に答えよ。

*貫之が馬にのりて、和泉の国におはしますなる、蟻通の明神の御
まへを、暗きに、え知らで通りければ、馬にはかにたふれて死にけり。
いかなる事にかと驚き思ひて、火のほかげに見れば、神の鳥居の見えけ
れば、「いかなる神のおはしますぞ」と尋ねければ、「これは、ありどほ
しの明神と申して、物とがめいみじくせさせ給ふ神なり。もし、乗りな
がらや通り給へる」と人の言ひければ、「いかにも、くらさに、神おはし
ますとも知らで、過ぎ侍りにけり。いかがすべき」と、社の禰宜を呼び
て問へば、その禰宜、ただにはあらぬさまなり。「汝、我が前を馬に乗
りながら通る。すべからくは、知らざれば許しつかはすべきなり。し
かはあれど、和歌の道をきはめたる人なり。その道をあらはして過ぎば、
馬、さだめて起つことを得むか。これ、明神の御託宣なり」といへり。
貫之、たちまち水を浴みて、この歌を詠みて、紙に書きて、御社の柱に
おしつけて、挿入りて、とばかりある程に、馬起きて身ぶるひをして、
いななきて立てり。禰宜、「許し給ふ」とて、覚めにけりとぞ。
あま雲のたちかきなれる夜半なれば神ありとほし思ふべきかは

（「新編日本古典文学全集」による）

注

*貫之…紀貫之。平安前期の歌人。 *和泉の国…現在の大阪府南部。

*蟻通…大阪府にある蟻通神社。 *明神…神の敬称。

*え知らで…気づくことができずに。

*物とがめいみじくせさせ給ふ…とがめることをひどくしなさる。

*禰宜…神官。 *すべからくは…当然。

*しかはあれど…そうではあるが。 *さだめて…必ず。

*御託宣…お告げ。 *とばかりある程に…しばらくの間に。

問1 本文中の「にはかに」を、すべて現代仮名遣いに直して、平仮名

で書け。また、次の（ア）～（エ）のうち、波線部（~~~~）が現代
仮名遣いで書いた場合と同じ書き表し方であるものを一つ選べ。

（ア）ほのかにうち光りて （イ）晴れならずといふことぞなき

（ウ）いづれの年よりか （エ）ひとへに風の前の塵に同じ

問2 本文中の二重傍線部（——）で示されたもののうち、主語が一つ

だけ他と異なるものがある。その異なるものを、次の（ア）～（エ）
から選べ。

（ア）見れば （イ）問へば （ウ）いへり （エ）おしつけて

問3 本文中の「覚めにけりとぞ」とは、「覚めたということだ」という

意味であるが、「禰宜」はどのような状態から覚めたのか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 貫之に神が乗り移っている夢を見ている状態

(イ) 託宣をする神が禰宜に乗り移っている状態

(ウ) 馬に乗って神社の前を通った貫之の夢を見ている状態

(エ) 馬が倒れたことをとがめる神が禰宜に乗り移っている状態

問4 次の(ア)～(エ)は本文中のできごとについて述べたものである。(ア)～(エ)を時間の経過にそって古いものから順に並べかえ、

記号で書け。

(ア) 貫之が和歌を詠んだ。

(イ) 倒れていた馬が生き返った。

(ウ) 貫之が鳥居を見つけた。

(エ) 蟻通の神が祭られていると貫之が知った。

問5 次の会話文は、光太さんと奈月さんが本文を学習した後、本文について話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い①・②に答えよ。

光太

本文から、神が貫之の無礼な行いを「A」と考えた

のは、貫之が故意にその行いをしたのではないからだとかるね。その後、貫之は和歌を詠んだけれど、その和歌はどのような内容だったかな。

奈月

本で調べたけれど、「雲が空を覆っている夜なので、蟻通

の神がいるとはうかつにも思わなかった」というような内容だよ。「ありとほし」という語は掛詞かけことばの解釈がさまざま

にできて、この和歌の「神ありとほし」は、「神蟻通」と「神有り遠し」の掛詞だそうだよ。「遠し」は、神がいると気づかなかった貫之のうかつさを表現しているんだね。

光太

なるほど。この和歌は、「B」だよ。貫之には、掛詞

という表現技法を用いて巧みに和歌を詠めるほど、和歌の実力があつたんだね。

① 会話文中の「A」に入る最も適当な表現を、本文中から十字で抜き出して書け。

㊦ 会話文中の **B** に入る最も適当な表現を、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 貫之が自らの行いに対する罰が何かを尋ねたので、卓越した和歌の力を示すことだと神が告げたところ、貫之が驚きためらいつつ詠んだもの

(イ) 貫之が和歌の達人として神に認めてもらおうとしたので、試しに和歌を詠むように神が告げたところ、貫之が即座に考えて詠んだもの

(ウ) 貫之が和歌を得意としていないと思っていた神が、あえて和歌を詠むことを求めたところ、貫之が神の予想に反して上手に詠んだもの

(エ) 貫之が和歌に熟達していることを知っていた神が、その腕前を見せることを求めたところ、貫之がすぐに行動を起こして詠んだもの

	問 5	問 4	問 3	問 2		問 1
⊖	⊖	⌒	⌒	⌒	⌒	
ア			ア	ア	ア	
イ		⌒ ↓	イ	イ	イ	
ウ		⌒	ウ	ウ	ウ	
エ		⌒ ↓	エ	エ	エ	
⌒		⌒	⌒	⌒	⌒	
		⌒ ↓				
		⌒				
		⌒				

問 1 にわかに

（ア

問 2 （ウ

問 3 （イ

問 4 （ウ

完 2

）↓

（エ

）↓

（ア

）↓

（イ

）

問 5 ⊖ 許しつかはすべきなり

⊖ （エ

）

問3 本文は、貫之が馬に乗ったまま蟻通神社の前を通ったため、馬が突然倒れて死ぬという場面から始まる。禰宜の登場は、本文の半ば「社の禰宜を呼びて問へば（神社の禰宜を呼んで尋ねると）、その禰宜、ただにはあらぬさまなり（普通ではない様子である）」の部分である。「ただにはあらぬさま」に着目し、続く会話部分を読むと、「汝、我が前を馬に乗りながら通る（お前は、私の前を馬に乗ったまま通る）」とある。会話部分の最後の「これ、明神の御託宣なり」とあわせて考えると、禰宜の言葉は神が言わせているものと判断できる。馬が生き返り起き上がったあと禰宜は、「許し給ふ（明神がお許しなさる）」と言って、神に乗り移られた状態から覚めたのである。

問4 **ポイント** 本文は、時間の経過とともに内容が変化しているもので、それぞれの選択肢のできごとの出てくる順序が早いものがより古いものとなる。アは、本文後半に「貫之、たちまち水を浴みて、この歌を詠みて（＝貫之は、すぐに水を浴びて、この歌を詠んで）」とある。イは、アのあと「馬起きて身ぶるひをして、いななきて立てり（＝馬が起き上がって身震いをして、いなないて立った）」とある。ウは、前半「火のほかげに見れば、神の鳥居の見えければ（＝もし火で見たところ、神社の鳥居が見えたので）」とある。エはウの直後『（貫之が）いかなる神のおはしますぞ』と尋ねければ、『これは、ありどほしの明神と申して……（＝「どんな神様がいらっしやるのか。」と尋ねたところ、「これは、蟻通の明神と申して……」）とある。よって、古いものから順に並べかえると、ウ↓エ↓ア↓イとなる。

問5 会話文は本文解釈のヒントになる。㊦空欄の前の「貫之の無礼な行い」とは、馬に乗ったまま、蟻通神社の前を通ったことを指す。この行いに対して、（禰宜に乗り移った）神は、「すべからくは、知らざれば許しつかはすべきなり（当然、私がいるとは知らなかったのだから許してやるべきだ）」と言っている。つまり、貫之は、故意に馬に乗ったまま蟻通神社の前を通ったわけではないので、許してやるべきだと神は考えたのである。㊧貫之が「あま雲のたちかさなれる……」の和歌を詠むことになった状況を捉える。神が、貫之を許してやるべきだと言ったあと、「しかはあれど、和歌の道をきはめたる人……明神の御託宣なり（そうではあるが、お前は和歌の道を極めた人だ。その道を明らかにして通り過ぎれば、馬は必ず生き返って立つことができるだろう。これは、明神のお告げだ）」と言ったところ、貫之はすぐにこの歌を詠んでいる。神は、貫之が和歌に熟達していることを知っており、貫之もすぐに行動を起こしたのである。